

『昭和21年12月21日 北海道地震々害調査報告』

戦災復興院技術研究所要報第17号

戦災復興院技術研究所刊 / 1947年 / B5判 / 52頁 / 図書番号 OKZ-0073

1946年12月21日4時19分、和歌山県潮岬の南沖約30km、北緯33度、東経135度付近を震源とする地震が発生した。戦災復興院技術研究所では、1947年の1月から2月にかけて所属する研究員4名を被災地に派遣して、被害の調査に当たさせた。本書はその報告書である。

亀井勇による「和歌山県下に於ける震浪と建築物の被害について」では、震害概況として関東大震災にも勝る規模の地震であったが、被害の大半は津波によるものだったとしている。

和歌山県の人的被害は死者239人、行方不明27人、負傷者728人である。地域別では西牟婁郡（串本町、白浜町、新庄村など）の死者60人、新宮市58人、田辺市37人などである。

建物の被害は倒壊1,373棟、半壊3,920棟、全焼2,399棟、床上浸水9,875棟、床下浸水4,284棟である。地域別で多いのは西牟婁郡の倒壊・半壊が1,772棟、新宮市の1,600棟などである。

地域別の特徴では、新宮市は津波による被害は全くなかったものの、地震動による建物の被害が大きかった。

この付近一帯は熊野川の河口洲で地盤が軟弱であり、1944年の東海地震でかなり建物が損傷したまま、十分な補修を終えていなかったことが影響したであろうとしている。

田辺市は中心街のほとんどが浸水した。市の約半分が海岸に面していて、まともに津波を受けた。また、市を横切るように会津川が南流していて、津波は同河川を遡って被害をもたらしたとしている。

最後に、田辺市や海南市に防波堤を、勝浦町や那智町に防潮堤を築造することや、今次の被害地を避けて国道41号の迂回路を整備することなどを提言している。

鯉田和夫による「岡山県及び香川県に於ける震害調査報告」では、岡山県震災対策本部の調査をもとに、同県の被害を死者53人、負傷者264人、建物全壊が2,935棟、半壊9,385棟としている。

児島湾の西側と吉井川河口に至るまでの、海岸から3～5キロの内陸地にかけて建物の倒壊が多いのが特徴と指摘する。児島湾付近は埋め立て地で、地盤が軟弱であることが影響していた。

また、香川県における被害は、地震動によるもののみだったとしている。死者は52人、重症者14人、建物全壊1,157棟、半壊5,597棟である。高松市、坂出市、丸亀市など沿岸部の被害が大きく、これも地盤が軟弱であったためとしている。

広井正路による「高知県に於ける震害調査報告」では、高知測候所発表を引用して、震度6、初期振動時間は18秒であったという。

地震動による被害は沖積層の地域に集中し、津波は室戸岬以東及び高知市以西に多く、四万十川付近は地盤が沈下し、安芸町と足摺岬付近は隆起したようだという。

同県の被害は死者670人、負傷者1,336人、建物の倒半壊・流失・焼失は2万3,099棟である。地域では中村町、高知市、須崎町の被害が大きかったとしている。

本書は謄写版刷ではあるが、津波浸水図や地層図などを含んでおり、次の地震に備えるために参考となる1冊である。

(田村靖広・市政専門図書館司書課長兼企画調査室長)